鋼の娘達

”太った猫”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鋼の娘達

【Ｎコード】
Ｎ２６１０Ｎ

【作者名】
”太った猫”

【あらすじ】
ここでは無い世界、ここでは無い時間、ここではない平行世での一つの物語。
世界には機械仕掛けの妖精達が蔓延していた。

人造人間の造り方

人造人間（ホムンクルス）の作り方

1．四十日間、男性の精液を蒸留器に密閉して置く、すると、人間とおぼしき透き通ったものが誕生する。その人間もどきに四十週間、自分の血液を栄養として与えてやる。その際、蒸留器の温度は牝馬の胎内と同じ温度に保つこと、これがが肝要である。

2．ここまでの行程に誤りがなければ、人の赤ん坊と瓜二つの人造人間が生まれているだろう。そうした後、自分の両親がそうしてくれたように「彼女（ソレ）」を育ててやればよい。

幾多の叡智が生まれ、幾多の挫折が生まれ、幾多の光と闇がその影を為した。

＊

ここでは無い世界、ここでは無い時間、ここではない平行世界（パラレルワールド）での一つの物語。

世界には妖精が蔓延していた。

R．J．Ｎｏｍａｎ（プロフェッサー）、それが、その要因の名前、肉の器（うつわ）を機械の身体に換え、複雑な魔術を組み込んだ電気回路により妖精の門（フェアリーズ・ゲート）を開いた。

そうして、世界には、機械の身体を持つ妖精達が、蔓延し、・・・世界は、そんなに変わらなかった。

普遍なる世界（前書き）

駄文な上に中途ですが、感想書いてくださると嬉しいです。やる気になります。

普遍なる世界

人の強欲はとどまることを知らず。怠惰も嫉妬も七つの大罪は未だ一つも淘汰されてはいなかった。そう、そこに機械仕掛けの妖精が現れたところでなにも変わることはなかったのだ。

その機械仕掛けの肉体を器用に操り、その妖精は黄金の髪を揺らし飛翔する。

獲物を見定め（ロック・オン）、「マスター、捕獲っ！！」合図とともにスパイダーネットが、打ち出され、獲物を絡め取る。

「やったよ、マスター」褒めて褒めてと言わんばかりに、背中の飛行ユニットを揺らしながら、青年の周りを文字通り飛び跳ねる。

「え、えーとキャスティ、燃料の無駄遣いはやめようね。貧乏だし、うち」いささかくたびれたような、無精ひげの青年が、なるべくカドをたてないようにと言い募るが、

「……」案の条、褒められるとばかり思っていた少女は、ゆっくりと青年の肩に降り立つと「マスター、髭剃ってください」「いや、あのキャスティ？」「猫背で歩かないで」「だからね、キャスティ」「お金が底をつく前に、仕事の選択肢があるうちに、仕事してください」「キャ、キャスティさん？」「だいたいあたしの燃料代って微々たるものだし、マスターが腹減った、死ぬとかいうから、この仕事引き受けたんですよ、私の本当の使用目的知ってますか、マスター」

「ええと、すいません、キャスティさん、僕が悪かったです」

「わかってくれればいいんです。まずは、髭を剃るところから始め

ましょう」
「え、え〜」
と、路地裏で漫才を繰り広げる。少女の名はキャスティ、この世界に現出する術を手に入れた。妖精の一人だ。

思想粘土

思想粘土（ソウルクレイドル）、それが、世界に妖精を現出させた魔法の名前だ。

その見た目は何の変哲もない茶色の泥の固まり、それに妖精の扉（フェアリーズ・ゲート）と呼ばれる宝石を埋め込み、そして、念じよ、それは、所有者の意志を反映し、少女の姿を基本とした様々な形態をとる。

家事の妖精（ブラウニー）、唄（シンガー）うもの、それは所有者の目的に応じ様々な形態（かたち）を取る。

ただ、ゆめゆめ、忘れるなかれ、妖精（それ）は決して、万能でもなければ、人間たちの奴隷ではないのだ。

様々な形態を取れる妖精に、魔法使（プロフェッサー）いは、呪（まじない）いをかけた。

身長は三十センチまで、女性型のみとする。ただ、それだけ、魔法使いは、無限の可能性があると言った。ただ、その可能性については、何も語らなかった。

鋼の妖精達（前書き）

鋼の妖精達

実際、当初、人類は、この新たなる友人を持てあました。精霊などはおとぎ話の中の存在であって、目の前に現れるものでは無かったのだから。

しかし、考えてみよう。身長三十センチの妖精（ソレ）は、超高性能の生体コンピュータなのだ。

統合機構オルガンの名の下に統一された秩序あるバイオコンピュータ　それが、いまの妖精（かのじょ）達だ。

妖精（ティターニア）の女王という司令塔の元、秩序だった役目を果たす彼女たちは人間達の良き奉仕者となった。

ただ、彼女たちを扱うにはそれに応じた器（うつわ）が必要なのだ。たとえばモーターサイクル、たとえばエアプレーン、たとえば、楽器等

飛行用ユニットと、捕獲用の網をバックパックにしまい込み彼女は、自身の器たるべきモノをガラス越しに物色する。

そこにある物体はどれも煌びやかに輝いて彼女を誘うが、その後ろからのそのそとかかる声が、彼女に現実をつきつける。

「いや、あの、キャスティさん、だから、その高いし…」

オールオブ

「信じられません、わたしはオール・オブ・ベルン、マスターの望みを最大限に叶え、マスターの為に、全知全能を尽くす、いうなればオールマイティカード」

「それなのに、それなのに、なんで私はここにいるんでしょう、というか、なんで私が召喚されたんですか、マスターの望みは本当はなんなんですか」

「いや、あのキャスティさん、大それた望みは無くてですね、日々の生活に困らなければいいなぁとか、そういうわけで、今日の夕食をいただきましょうよ」

「マスターは嘘をついていますっ！！　そんな小物に私が召喚されるわけはないんです、というか私の沽券にかかわります」

「小物って、いや、まぁその、たまにはそういう間違いもあるんじゃないかなぁとか、それにあんまり怒ると可愛い顔が台無しですよ」

「…っ、そうやって毎回毎回うやむやにしようとするんですから、だいたい私、マスターの事ほとんど知らないんですよ、寝起きが悪いとか、無精髭剃らないとか、そういうだらしないところしか、そんなそんな男に私が召喚されるとは、屈辱です」

「いやあのキャスティさん、ごはん冷めますよ」

「…っ、まぁ、食べ物に罪は無いですからね」

こうして、微笑ましい二人の日常は過ぎて行くのだった。

非日常への回帰

「タマネギ、ニラ、ジャガイモ、チンゲンサイ、ううっ、お肉が食べたいです」とか、悲壮な声を響かせながら、少女は家の中でオンラインサービスのモニターの上を飛行する。

「ところで、キャスティさん、そろそろ、ここも長くなってきたし、引っ越ししません」家の中、アンティークともいえる箒を持った青年の呼びかけはいつもながら唐突だった。

「マスター、また家賃滞納したんですか、またなんかで借金したんですか、いいかげん一つのところに落ち着きたいです」重たい空気の元、可愛そうな程に肩を落とす少女

「いや、家賃はね。この前のでなんとか払い終わったし、今は借金もないんだけど、そろそろかな～、とかね」申し訳なさげに、箒をいじりながら告げる。

「と、いうか、なにがそろそろなんですか、いつもいつも、うやむやにして、ん、というか、マスター、もしかして、珍しく朝からどこにもいかずに手伝ったのは、そういう魂胆だったんですね」

「うん、それでね、そろそろいいかな、キャスティさん、なんかね、本当にそろそろな気がするんだよ」

「もう、マスターはいつもいつもそればかり、なにがそろそろなんですか、もぅ」少女が、ため息をつきつつ、パーソナルデバイスを閉じた。その瞬間だった、真っ赤ななにかがガラスを突き破って転がり込む。

「今日という今日は逃がしません」「うわー、ガラス代、せっかく借金もなくなったのに」「マスター、これは不可抗力です、請求書だけ、そこの誰かに押しつけて、いざ逃亡です」そんななか標的の二人の発言は極めて暢気だった。

ガーネット

「やぁ、久しぶりだね。ガーネット、相変わらず凛々しくていらっしゃる」
「私の全てを捧げて尽くしたというのに、それはもう髪の毛の一筋にいたるまで」
そう言って、一歩、詰め寄る。
「いやほら僕、辞表だしちゃったし」
「大丈夫です。公式には特殊なる任務に従事中となっていますので」
「いやほら、給料とかもらってないし」
「ご心配なく一銭たりとも手を出しておりませんので、膨大なる報酬が山積してます」
「いやほらジョゼナンにお前達のことは任せてあるだろう」
「死んだというならまだしも、生きて居る限り私が魂を捧げるのは、貴方ただ一人のみです、マイ・ロード」さらに一歩詰めより。その首根っこを捕まえて揺さぶる。
「ええっとほら、ガーネット、君が認めてもサファイアとエメラルドがね」男は、目線をさまよわせつつ言い訳じみた言葉をもらす。
「大丈夫ですサファイアは、あれ以来閉じこもって私でさえ見ていませんし、マスターが迎えに行かない限りあれは一生でてきませんよ。エメラルドは、あれ以来無言で仕事していますし。怖いんですよ、いいかげん戻られてください、マイ・ロード」
「それに、なに新しい妖精召喚してるんですか」
「いや、なんとなく思想粘土いじってたらね、つい」
「つ、つい、ついで呼ばないでください、って白銀（プラチナム）の姫！？」
「え、えーっとキャスティです。初めまして」
「キャスティって、真名を封じましたね」
「いや、ほら、見つかると面倒だしね」
「なるほどようやく合点がいきました理由は彼女を呼んでしまった

からですか」
「やれやれ、トパーズ、ダイアモンド、ルビーはロストした。もういいじゃないか、次は君の番かもしれないんだぞ、ガーネット」
「覚悟の上です。マイ・ロード、元からそういう約束でしょう」

アップル・シード

魔法使いは呪(のろ)いをかけた。身長三十センチ、それは、女性のみとする。呪いを解くには王子様の接吻が必要なのだ。それは、この世界に存在を止め置く膨大なる生命のエネルギー、そうそれは試金石なのだ。

プロフェッサーは言った。「だって、つまらないだろう」と

「お前の顔だけは見たくなかったよ教授(プロフェッサー)」

「ああ、それは重畳、男に好かれるなど、願い下げだ」

この”世界”は滅びかけていた。ここは世界の外に作られた偽造世界、ここは妖精のあふれる世界ではなく、その真実は逆、妖精の世界に滅び行く人間達が引き込まれた。

そして人間達は妖精とその圧縮された時間という味方をつけた。

滅び行く人間達を護る。その為に妖精を行使する。それが、この世界だった。二つの世界は滅ころびかけていたのだ。妖精を信じる力は消え去る寸前にて、妖精界も滅びに貧していた。そうして人間達の世界もあの日滅びるはずだった。

大気は猛毒に満ち、海は渦巻いた。その滅び行くはずの世界に介入したものがいた。

R・J・ノイマイン、プロフェッサーの異名を持つ、位界の住人、多重世界に介入する異分子、魔術師と言う。

「黄金の盾を持つ騎士、トパーズは、君を護って死んだ」

「全てを貫くダイアモンドは、君の思想を貫き、そうして、消えた」

「浄化の炎をまき散らし、ほんのわずかの地表と引き替えにルビーは埋もれた」
「君のいない間にも戦いは続き、仮初めの君の平穏の裏で、僕らは最期かも知れない林檎の木を植える

アースフィア

代理戦争、それは、外なる敵と戦う術を持たぬ人間が思いついた愚行、いや蛮行と言うべきか、妖精を呼び出し、機械の身体を与え、マスターと呼ばれる者に剣を捧げさせ、そして、敵と戦わせる。

初めは、人間達も外敵（ソ・レ）と戦おうとしたのだ。しかし、立ち向かった瞬間に敗北する。台風と戦える人間はいない、津波と互する人間はいない。炎の中に立ち続けられる者などいないのだ。

目的はわからない。ただ、ソレは蹂躙する。それだけの存在だった。和解を、コミュニケーションをはかった人間達も少数ながらいた。が、そのすべては徒労に終わった。光に言葉は通じない。闇に人は抗する術をもたない。それはそういうものだった。

いうならば別次元の位相に介在する敵、ただ違うのはそれが現実に被害を及ぼすと言うこと。それは偶然か、必然か、ソイツは唐突に現れて言った。「選びたまえ、このまま滅ぶか、戦うか」と、唐突に響いたその声に足下を救われたとしても、人々に罪は無かった。

「よかろう、闘うための術と知恵を授けよう、ただし、闘うのは君たちだ」

妖精の女王（ティーターニア）を呼び出し、妖精の門（フェアリーズ・ゲート）を開き、妖精の騎士とそれが仕える人間達を選び出した。

再び目の前に現れた妖精を人々は受け入れた。妖精達の力は増し、喜んで古き恩知らずの人間達の為にその隣人達は力を貸した。

それが、現在、アースフィアと呼ばれる世界の現実なのだ。

城門の君主

「しかし、ここに再び訪れたと言うことは、また、闘う気があるということなのだな、エリアーノ＝クルス」男は無造作に青年の名を呼ぶ

「・・・」

「沈黙は肯定と受け取ろうか、それでは、もう一度問おう、君は何のために生き、何の為にその剣をささげるのかと」

芝居がかった大仰なそぶりで、プロフェッサーは言う。

男は、一度も青年を見ない、終始背を向けたまま、この奇人こそ、何を見据え、何を目的とするのかわからぬまま、刻は刻まれる。

「それでは、再び君の騎士達を迎えに行き給え、いいや、彼女の方から訪れたか、まず、最初にかけるべき言葉を選び給え、その湖水（エメラルド）の乙女に。」

「や、やぁ、久しぶりだねエメラルド、元気」その瞳を閉じた黄金の髪を持つ女性にかけられた言葉は不抜けたものだった。

　すると彼女は、やおら、近づき、己が君主の前に一度跪くと、立ち上がり、容赦なく拳を入れた。一発、二発、三発と、その連撃はやまず。それは、もはや豪雨という名の暴力と化して襲う。

「フン、鈍っていたらどうしようかとおもったぞ、」

「あ、あのー、え、エメラルドさん？」

「あ！？　一度忠誠を誓った身だ。好きに使え、サファイアは知らん、が、貴様が戻ったのなら、飛んでくる、フン、言ったそばから、これだ、頭が痛い」

「マスター、マスター、マスター、ホンモノですよね。偽物じゃな

いですよね。マスターだ。マスターだ、もう離れないですぅ、って、この娘だれですか、マスターの浮気者ーって、位階が私より上です。でもでもマスターは譲れないです。再び、マスターに出会うために、声も気配も消してじっとしてたんですから」

「ええっと、マスター、これは、どういうことか、ご説明ねがえるんでしょうね？」原形を取り戻した白銀の乙女が問う。

「ええとキャスティさん、笑顔で青筋たてられると怖いんですけど」

「答えたくないのなら、私が、代わりにそれに答えようか、自分たちが生き延びるために妖精達を犠牲にするのが嫌だと逃げ出した。それこそ偽善、その為にダイアモンド、ルビー、トパーズはロストした。そうして、なぜ君は生きている。そうして、白銀の姫を連れているのかな。城門（ルーク）の君主」

「マスターを愚弄するな、狂人、それ以上は踏み込みすぎだぞ、魔術師。我らが妖精（ティターニア）の女王を誑かした張本人が」

「はは、望んだのは彼女の方だよ、そうしないと、彼女の方がが壊れそうだったのだ。」

「それは、願い、そう純粋なる願いだったのだ。知っているはずだ」

バトル・ロンド

「さて、長話は後にしよう。帰ってきて、再び、その意志があるのなら、闘うのが相場というもの」終始、プロフェッサーは背を向けたまま、その背に刃を突き立てろと言わんばかりに背中をさらす。

「さて、誰を使う。湖水(エメラルド)の乙女、情熱(ガーネット)の炎、静謐(サファイア)なる心とよりどりだな」

「全員だ」

「ほう、最弱なる白銀の乙女か」得たりというように、プロフェッサーが笑う

「・・・白銀(プラチナム)の乙女、お前を解放する。」

世界は荒廃していた。渦巻く大気は猛毒となり襲い。かつて海と呼ばれたものは、天高く渦巻く潮流となって雷とともに我らに襲い来る。大地すら、我ら人間がそこに立つ事を拒む。

その空間に立つ事を許された者達が、その術として、己が妖精を傍らに、毒の満ちたる世界に降り立つ。

目の前にあるのは暴虐、人とは交わす言葉すらない蹂躙、そこに唯一　闘う術を持つものが、傍らの妖精に諦めたかのように声をかける。

「白銀(プラチナム)の乙女、お前は誰よりも弱く、そして誰よりも強い。」

それに、言葉は通じない。ただの悪意のかたまり。それを人々は悪魔と呼び、鬼と呼ぶ。暴乱の塊。その一端を、フィールドに閉じ込め、闘える形に変換する。

それは、戦闘機の形だったり、戦車だったり、それを人間の闘える形に認識させる。

今回の敵は、蜘蛛の化け物だった。

「属性は土に変換、マスター、どうします。」

「ああ、初陣だったな、おまえは、それでもやることは同じだ。武装衣装（アーマメント）、フェイズ、エメラルド」その閉じられた瞳は、空間の全てを把握する。形無き敵の攻撃を具体化し、そして受け流す。風の属性を持つ湖水の乙女が、召喚され、君主の声に従い武装化される。

豪奢なる。緑色の龍の鱗を思わせるスカートに風を翼とする靴を履き。その腕、その、身体に風をまとわりつかせ、一陣の刃と化して彼女は敵を目がけて跳躍（とぶ）する。

かけがえのない明日

機械に埋め尽くされた部屋で、教授は唄う。それはもう狂ったかのように。いいや、この男が、まともであるなど誰が言っただろうか

「そう、運命は予告無く君の扉(こころ)を叩く、承前、翻弄され、あがき続けたまえ、それが、それこそが人間なのだ！！」

「そう、その程度では、この世界は絶望しなかった。この戦いで得られるものはたかだ明日という一日、だが、しかし、かけがえのない明日(いちにち)なのだ。」

翡翠の乙女が跳ぶ、限られた空間(フィールド)の中で、君主(ロード)を得た妖精に迷いはない。鋼鉄のスカートを履き。自らの身体を鋼鉄の衣装と化して、ただ自らの君主(ロード)の願いの為に闘う。

刃と化した脚が、強大なる蜘蛛の顎を叩き落とす。粘着性の糸を吐く腹部に、風を纏った腕が突きつけられる。

全ての人間が、この妖精界に存在できた訳では無かった。ある者は狂い、ある者は、存在していたという事実ごと消滅した。

それでも生き延びた人間は、妖精と契約しようやくこの世界に存続できる。そうこの世界に存在するために必要な楔(アンカー)なのだ妖精は。

その中で、さらに戦える力を持ったものを君主(ロード)と言う。高貴なる義務(ノブレス・オブリージュ)を持つものたち。

「我が君(マイ・ロード)！！」

声に応えて、エリアーノがそれに、剣を突き立てる。流れ込むのは悪意、ただただこの世界を滅ぼさんとする意志。

それに耐えて、青年は言う。ただ一言、「塵に帰れと」

精神のせめぎ合い、これに耐えきれず幾人が逆に塵に帰り、もしくはただなる悪意となったか、得られるものはたかだか明日一日、それでも、なんとかけがえのない明日だろうか。

諦めれば全てがそれで終わる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2610n/

鋼の娘達

2011年9月4日12時06分発行